

私たちが考える「学校づくり」の視点

○子どもたちの側からの「授業づくり」と「仲間づくり」

1. 受験・学力テスト体制を改め、「問う」ことを大切にした授業づくり
2. 子どもたちの実世界に即した活動と、連帯と共感的な仲間づくり

○権利主体の発達要求にもとづく学校の教育条件の前進

1. 「問い」がうまれる「授業」に必要な時間と休息がある生活条件
2. 子どもたちの安全・安心な学校施設と条件
3. 教育条件の最も大切な要素としての教職員の働き方

○子どもたちを支える教職員の教育の自由と父母・地域との共同

1. 子どもに即した教育課程と豊かな学びをつくり、行事・活動を支える教師集団の協働性
2. 保護者・地域の人々と、子育て・地域の未来像の語り合い
3. 子どもを取り巻く、保護者・地域の大人、教育機関・福祉機関・医療機関との共同

私たちは、北海道の先生と、子どもたちのためにひとりひとりが持っている力を出し合う「力合わせ」を大切に、子どもたちの命と健康を守り、健やかな成長を保障するための取り組みを進めています。

「一斉休校」以降の私たちの取り組みを動画をまとめました。QRコードからご覧ください（facebookページに移動します）。



提言「子どもたちが生き生きと学べる コロナ収束後の学校づくりを…」

企画・発行 全北海道教職員組合

発行責任者 川村 安浩

〒060-0909 札幌市東区北9条東1丁目2-22 北海道労働センター3階

☎011-742-0101 FAX 011-742-1001

ホームページ <https://www.dokyoiso.net/>

メール dokyoiso@saiparen.ocn.ne.jp

2020年5月25日発行

私たちは全北海道教職員組合、略称は「道教組」です。教職員組合は、全道の先生方と子どもたちのための集まりです。先生方が元気に教育活動に向かえるための知恵を寄せ合ったり、集まりをしています。SNSでも発信していますので、ぜひご覧ください！

facebookページと
組合加入者向け
Facebookグループで
道教組の取り組みを発信！
www.facebook.com/dokyoiso



道教組の取り組みを写真
や動画とともに発信！
twitter.com/dokyoiso



【提言】子どもたちが生き生きと学べる コロナ収束後の学校づくりを…

2020年8月 全北海道教職員組合・北海道子どもセンター



みんなが考えさせられた「学校」という場所の意味

4月、始業式。約40日間の臨時休校を終え、子どもたちは新しい学年に不安と期待を持ちながら学校に帰ってきました。小学5年生に進級した子が、新学期に次のような詩を書いてくれました。

学校ってなんだ。

1時間がすぎていく。
勉強だけがすぎていく。
1時間がすぎていく。

学校ってなんだ。

友達をつくれるところ。
けんかするときもある。

学校ってなんだ。

学校ってなんだ。
夢をもち場所。
楽しい場所。

学校ってなんだ。

2月末から4月にかけて、そして4月下旬から5月いっぱい二度にわたる臨時休校は、私たち大人だけではなく、子どもたち自身が「学校ってなんだろう」と考えるきっかけを作りました。

ある低学年の子は日記で「学校が休みになったことを知ってやったあと思ったけど、やってみると学校に行ってきた方がいいな」と思いました。・・・と書いてくれました。

最初は喜びだった家にいられる生活も、月日が経てば魅力的ではなくなってしまったのでしょ。『学校に通っての方がいいわね』という心の深い部分にあるものを表現してくれたようですよ。

また、別の中学年の子は、4月さいごの登校日の帰りに「せんせい！私は学校に来たくてしょうがないんだよ」と切なそうに訴えて家路につききました。家だけでは満たされない、学校という場所の価値を自分の語れる言葉で表現してくれたのかもかもしれません。

こうした声に耳を傾けると、子どもたちにとって「生きる」とは、学ぶことであり、学校に通うことだと気づかれます。子どもたちにとっての学校という場所が持つ意味は、私たち大人が考える以上に大きいのです。

2月末から、およそ70日の臨時休校が続きました。子どもたちは

ひとつと進級し新しい仲間や担任に出会い、あるいは進学をして新しい環境にふれた瞬間で「時間(とき)」が止まってしまいました。

学校は「教育・福祉、そして医療」という社会基盤がそろっている場所です。仲間と関わり学び合い、美味しい給食に心と体を満たし、気持ちや体調がすぐれない時には養護教諭の先生やスクールソーシャルワーカーの方と腹を割って話したりすることもできます。

学校には、子どもたちが幸せを分かち合えるような営みを作り出す力があります。学校は地域の真ん中であって、子どもたちに関わる大人をつなぐ場所でもあります。集う大人たちが「この地域で子どもたちをこんなふう育てていきたい」という願いと力合わせがあります。

子どもに寄り添う学校づくりを

学校教育は、学校行事等を含む教育活動を通して協働的な学び合いが行われる営みです。子どもたちが学校で生き生きと学ぶことや、教育活動を通して生き生きと、「ぼく、わたしは、いま『生きていく』！」と実感できる学校づくりを、学校ぐるみで考えていく必要があります。

私たちは、本格的な学校再開を前に、大幅な時数不足や感染予防に議論が終始し、子どもたちの姿を置き去りにしてしまうことを危惧しています。

これまでの多くの時間を家庭で過ごした子どもたちは、学校に戻ってきて「人と関わるよろこび」を第一に表現するかもしれません。発達段階によっては、授業中の落ち着かない言動や、けじめのない行動などが目立つこともあるでしょう。

運動会が延期や中止になってしまった小学校、部活動の大会という大きな節目がなくなってしまった中学校の教育活動の中で、子どもたちは目標を見出せず、ストレスを表現することがあるかもしれません。

私たち教職員は、子どもたちの思いに寄り添い教育実践を組み立てられる「教師の専門性」を持っています。

学校再開にあたり、学校に戻ってきた子どもたちの休校中の思いや、いまの不安を受け止めながら教育活動を軌道に乗せていくような、思いやりのある学校づくりを進める必要があります。

休校明けの「カリキュラム・マネジメント」への力合わせを

4・5月の臨時休校で100時間を越える学習活動の遅れを見まわっています。必然的に、年度当初に確認している教育課程を見直す作

業が必要です。文部科学省は5月15日付の通知の中で、児童生徒・教職員の負担軽減に配慮しながら学校における指導を充実させることの必要性を掲げ、必ずしも標準時数ありきではないことを示しています。

学習指導要領で示されているカリキュラム・マネジメントの考え方に立てば、学習指導要領における各教科の「内容」を羅列なく効果的に学ぶよう学習計画を再構築したり、教科等横断的な学習をより一層意識して単元計画を改めて行うなど、本格的な学校再開を前に各学校で考えられることはたくさんあります。

詰め込みや腐敗な日課で「こなす」のではなく、子どもたちの学びを豊かにする視点で教育課程を改めて考えるのです。これこそ私たちが昔から大切にしてきた「教育課程づくり」なのです。

学校再開の節目は、「カリキュラム・マネジメントの考え方のもと、わか校の教育課程づくりをさらに進める」ということを教育関係者は立場を超えて尊重し合い、力合わせを進める節目としなければなりません。

コロナ収束後の学校のすがた

「オンライン授業」や「9月入学」など、報道ではコロナ収束後の新しい学校の形が早々に論じられています。また、文部科学省は「新しい学校の生活様式」として、「可能な限り身体的距離を確保すること」を掲げています。

コロナ収束後の学校づくりを考える際には、学校は人と人が信頼を寄せ合い安心して暮らしかる共同体であり、そこに学びが生まれるという、これまで大事にしてきた「学校づくり」の姿を土台として考えたいものです。

そのうえで、今回の一斉休校のように学校に集まることができなくなった場合の代替手段としての「オンライン授業」に備えたり、制度として少人数学級の導入をすることで集団感染の危険性を回避したり…といった新しい取り組みを考える必要があります。

その際にはここで触れてきたような「『学校』の意味」を大切にしたい議論が欠かせないのはい言うまでもありません。

子どもたちが不意に考えることになった「学校ってなんだ？」という思いに寄り添える学校づくりを、ともに進める力合わせの輪を広げましょう。